

芸術における認知と日常認知の関係：  
現代アート展における対話型鑑賞プロトコルの分析から  
**Relationship between artistic cognition and everyday cognition:  
an analysis of art appreciation through discussion  
in a contemporary art exhibition**

平野 智紀<sup>†</sup>, 前田 ことみ<sup>†</sup>, 島影 圭佑<sup>†</sup>  
Tomoki Hirano, Kotomi Maeda, Keisuke Shimakage

<sup>†</sup> 公立はこだて未来大学  
Future University Hakodate  
tomoki@fun.ac.jp

## 概要

芸術経験は認知や感情を変容させるものであり、芸術を鑑賞することは作品と鑑賞者の日常経験をつなぐイマジネーションのやりとりとして捉えられる。対話型鑑賞は、鑑賞者間の協働的理解を促す手法として注目されているが、現代アート展での実践例は多くない。本研究では、現代アート展「FAYM2024」での対話型鑑賞場面のプロトコル分析を通じて、芸術と日常認知の架橋を探った。作家自身も他の鑑賞者と同じ立場で関わり、作品を中心とする対話が成立していた。

キーワード: 対話型鑑賞, 日常認知, アートコミュニケーション

## 1. はじめに

これまで、芸術による人の変容は実証的に語られてこなかった。OECD 教育研究革新センターによるさまざまな領域の芸術の効果に関するレビューによると、芸術教育の効果が実証的に検証されたエビデンスは見出されなかった (OECD 教育研究革新センター2016)。一方で、Pizzolante (2024) によるシステムティックレビューでは、絵や音楽、ダンスなどの芸術経験に関する 23 件の実証研究やレビューを踏まえ、芸術経験が人の認知や感情を変容させる力を持つことを指摘している。彼らによると、芸術の経験が人に与える変化は、芸術と出会う前・考えの整理・新しい見方の受容・長期的変容の4段階で起きるものである。

岡田・縣 (2020) は、芸術表現と鑑賞に関する研究を踏まえ、「アート・コミュニケーションのモデル」を提案している。このモデルにおいて、芸術とはイマジネーションのコミュニケーションであり、表現者は自身のコンセプトなどを作品という形に結実させ、鑑賞者は作品を自身の日常経験などを踏まえて解釈するという形が提案されている。芸術経験による認知や感情の変化について、岡田らは「触発」と

いう概念を使って説明する。

芸術による認知や感情の変化を引き起こすため、広く普及している芸術鑑賞の方法論として、対話型鑑賞がある。対話型鑑賞は、ファシリテーターによって促されながら、複数の鑑賞者が一つの芸術作品について対話を通じて鑑賞を深めるための手法であり、対話型鑑賞によって、作品に関する協調的な知識が構築されるとされている (平野 2023)。一方で、対話型鑑賞は作品に描かれている要素の観察をもとに知識を構築するため、ミニマルな作品やコンセプトualな作品に向かないとも言われる。近代以前の美術作品と現代アート作品では、活性化する脳の部位が異なるとの指摘もある (川畑 2012)。つまり、近代以前の美術と現代アートは大きく異なると言える。では、現代アートにおいて、どのような作品が、どのように人の認知や感情を変容させるのだろうか。

本研究では、実験的な現代アートの展覧会において、対話型鑑賞が人にどのような認知や感情の変化をもたらすのか、明らかにすることを目的とする。

## 2. 本研究の文脈 : FAYM2024

研究フィールドとして、第三著者がキュレーションを担当し 2024 年 10 月 7 日から 19 日まで東京・西麻布で行われた展覧会「FAYM2024」

(WALL\_alternative, 2024) を取り扱うこととした。同展では、「西麻布を裏返す」をテーマに、日常経験と芸術的な経験を架橋する 4 名の作家による作品展示を中心に、公開インタビューやワークショップなどの催しが行われ、西麻布という場所の新たな姿を発見することが目指された。

対話型鑑賞会は 10 月 11 日に行われ、7 名の参加があった。第一著者の監修のもと、研究のねらいを

共有しない大学院生がファシリテーションを担当した。鑑賞作品は楠見清の《無言板》と、東谷としやのライブドローイングであった。作家二名は対話型鑑賞会に同席した。楠見清の《無言板》は、街中にある、風雨の影響や経年変化で文字が消えてしまった看板を撮影した風景写真の作品シリーズである。とくに鑑賞会で取り上げた作品は《2021 Roadside Odessey: 2021 年路傍の旅》と題されたものであった。ペインターの東谷としやのライブドローイングあるいは議事録絵画は、対話型鑑賞ワークショップ中の発話をグラフィックとして表現したものであり、ワークショップの最中にも常に更新され続けるものであった(図2)。いずれも実験的な現代アート作品と言えるとともに、表現者の日常経験が芸術として昇華されたものである。

図1 楠見清の作品



図2 東谷としやの作品



### 3. データ分析方法

本研究では、この対話型鑑賞会における二つの作品の対話プロトコル(鑑賞時間は1作品につき15分程度)を書き起こした上で意味のユニットごとに区切り、分析対象とした。また、この書き起こしをもとにした作家へのふりかえりインタビューを収集した。インタビューは2025年6~7月にかけてオンラインで行われ、インタビュー時間は各60分程度であった。

これら鑑賞場面のプロトコルとふりかえりインタビューの質的分析を通じて、芸術経験と日常経験を架橋する現代アートの鑑賞のあり方を探ることを試みた。

### 4. 結果と考察

《無言版》鑑賞の初期において、鑑賞者は《無言板》に対し、「黒い」「でかい」(鑑賞者B, ユニット3)といったあいまいな形容詞を用いて表現していた。鑑賞者はまず、自身の日常的な経験や既存の知識と照合しながら作品の意味を見出そうと試みていたが、「何かって言えない」「生活にはないようなものだから」(鑑賞者B, 5)といった発言に見られるように、明確な解釈には至らなかった。また、作品を「看板」「案内モニュメント」(鑑賞者A, ユニット8)などの日常的な事物に当てはめようと試みたものの、それらにもうまく収まらないことへの戸惑いや困惑が「異質」「不気味」といった発言として現れた。これらの発言からは、作品が鑑賞者の日常的な知識や枠組みによる理解を拒む非日常的な存在として立ち現れたことにより混乱や違和感が生まれた一方、理解

できなさそのものに対する好奇心や引っかかりが、後の対話や解釈の広がりへとつながる出発点であったことが伺える。その後、対話の進行とともに、「異世界への扉」「どこでもドア」(鑑賞者 E, ユニット 22/24)「ゼーレ」「モノリス」(鑑賞者 G, ユニット 32)といった、鑑賞者の個人の日常背景からくる比喩表現が見られるようになった。これらの発言からは、単に直感的な感想の共有にとどまらず、自身の記憶や想像力から作品の意味を自ら構築しようとする姿勢がうかがえる。この鑑賞で注目すべき点は、作家である楠見氏が参加者の一人として参与しており、ひとつの正解としての作家の意図を提示する立場ではなく、ファシリテーターに近い立場で対話に入っていたという点がある。このことは、後のインタビューにおける楠見氏の発言からも明らかになった。楠見氏は鑑賞の最後に、参加者に気づきを促す糸口を投げかけることを意図しており、作家の意図を明示的に語ることは避けつつも、他者の語りに乗っかるような柔軟な姿勢をとっていた。これによって、作品理解が一義的に収束することなく、参加者が解釈を自由に広げる余地が保たれた。《無言版》は、作品が鑑賞者のイメージーションを刺激し、多様な解釈を引き出す力を持っていたと言える。楠見氏は《無言版》をデュシャンや赤瀬川原平などの美術史的な視点と接続可能なものとして位置づけたうえで、対話型鑑賞においては、こうした美術史的背景に言及しすぎることは参加者の解釈を妨げかねないため、あえて語らない選択を取っていたことがインタビューから伺えた。

その後のライブドローイングの鑑賞では、作品が鑑賞中に更新され続けるという構造そのものが、鑑賞者の認知や感情に新たな揺らぎや気づきを促していた。鑑賞者は「循環参照」「アキレスと亀」(鑑賞者 E, ユニット 93/96)といった比喩を用いて、自身の発言が作品に反映され、さらに作家によって変化した作品に反応するというインタラクティブな状況を言語化していた。加えて、このグラフィックを「ノート」や「テープレコーダー」に例えた発言からは、対話型鑑賞において生起する経験を、自身の日常にある具体的な事物になぞらえて表現しようとする試みが読み取れる。こうした表現は、《無言版》の鑑賞の冒頭で表明された作品に対するあいまいな印象とは異なり、その場で作品が変化するという特性が鑑賞者の日常経験と結びつきやすく、より作品の解釈

が深まったことが示唆された。

これらのことから、本研究で取り上げた現代アートの対話型鑑賞では、参加者の鑑賞体験が単に受動的なレクチャーや対話のみを通じて起こるものではなく、作品の特性と鑑賞者の相互作用から新たな意味が構築されるものであることが示唆された。

## 文献

- 平野智紀 (2023) 鑑賞のファシリテーション:深い対話を引き出すアート・コミュニケーションに向けて. あいり出版
- 川畑秀明 (2012) 脳は美をどう感じるか—アートの脳科学. ちくま新書
- OECD 教育研究革新センター著, 篠原康正, 篠原真子, 巖岩晶 訳 (2016) アートの教育学. 篠原書店
- 岡田猛, 縣拓充 (2020) 芸術表現の創造と鑑賞, およびその学びの支援. 教育心理学年報, 59, 144-169.
- Pizzolante D, Pelowski M, Demmer TR, Bartolotta S, Sarcinella ED, Gaggioli A and Chirico A (2024) Aesthetic experiences and their transformative power: a systematic review. *Front. Psychol.* 15:1328449.
- WALL\_alternative (2024) FAYM2024. <https://avex.jp/wall/exhibition/248/> (accessed online, 2025/04/15)